

〇市到着を知らせるアナウンスに、見るともなく、近づく町並に目を向けていた夏子は、急に思い立って途中下車をする気になった。夏子の実家のある町の駅はまだ先であるが、帰りを急ぐ気にはなれなかった。

数日前、実家の兄から電話があった。父が入院して、夏子に会いたがっているから、早目に帰って来てほしいと言うことだった。五年前に母が亡くなったとき以来、帰郷していない。

久し振りに見る駅周辺はすっかり変わっていた。改札口を出ると、そこはもうショッピング街であった。夏子の視界に入るもので、郷愁をさそうものは何もなかった。随分変わったものである。

三十数年前、夏子はこの町で恋をした。夏子が好きになった彼は、夏子との将来の為にマンションを借りていた。当時、新幹線のホームから見えたのだが、今は高層ビルに阻まれて見えない。そこでの生活を夢見た夏子だったが、ついに実現はしなかった。彼との結婚を父が許さなかったからである。その頃、夏子の父は大手企業の取締役として、〇市に単身赴任していた。東京の音大を卒業したば

かりの夏子は、赴任先の父の宿舎に居候を決め込み、軽い気持ちで駅前のホテルのフロントに勤務していた。長く勤める気はなく、音楽関係の仕事が決まるまでのつもりでいた。夏子を溺愛する父の為に、親孝行のつもりでしばらく同居していたのである。

昭和〇〇年秋、夏子の勤めるホテルに彼は途中入社し、そして、フロントに配属になった。ところが彼は全く英会話ができなかった。いかに地方都市といえども、外国人を受け入れできる数少ないホテルとしては、英会話の力はフロントで必要不可欠のことであった。場違いといってもよい配属であった。

彼は、外国人が話しかけても平然と無視した。そのため彼に代わって外国人の応対を引き受けるのはいつも夏子だった。夏子の会話は実に流暢で、相手に喜ばれると同時に、彼の無能ぶりに不平を言われるのだった。夏子は、そうした会話をけっこう楽しんでいたのだが、外国人の不満を彼に伝えても、彼は知らん顔をしていた。

彼は常に遠くを見る眼差しで、何を考えているのかつかみどころがなく、夏子達に話しかけることもなかった。そういう彼が、なぜか夏子には気になったのである。

夏子は背が高く、スタイルには自信があった。学生の頃、東京では夏子に言い寄る男達は少なくなかった。適当にあしらうことに慣れていた夏子は、側にいても夏子に関心を示さない彼に不満であった。彼は無口で、常に愁いのある眼差しをしていた。話しかけるとまっすぐに夏子を見つめ、静かに答

えた。今まで夏子が接したことの無いタイプの男性であった。

一見して弱々しげで、生きることには投げ遣りに見えた。虚空を見つめて物思いに沈む横顔には、とくに、ぞつとするような冷たさを見せ、少し前に張り出した顎には、意志の強さを感じさせるものがあった。それでいて、恐る恐る声をかけると、振り向いた表情は、いたずらを見つけられた子供のようにはにかみ、かすかに微笑むのだった。夏子はそんな彼がたまらなくいとおしく、いつの間にか側にいて話をしたいと思うようになっていた。

「今夜はお暇ですか？ 差し支えなければ私とデートしてくれない？」

夏子は、朝九時に退社する夜勤明けの彼にそつと耳打ちした。彼は驚いたように夏子を見つめ、「かまわないけど、なんで俺なの？」

と、彼はうれしくもなさそうに首をかしげた。自分の誘いに喜ぶ様子も見せない彼に、夏子はむかついたけれども、

「私の退社時間に迎えに来て！」

と、言い捨てて彼の側を離れた。

夏子はその日、一日中、気もそぞろで仕事を手につかなかった。ようやく退社時間となり、夏子はあわてて社員用裏口から外に出た。彼が来るはずの通りを見ると、カラン、コロンと下駄履きの彼が近づいてきた。

「ゲッ！ なに、あの恰好は？ あれでうら若き乙女とデートをするつもりなの！」

彼はエンジ色のセーターにジーパン、おまけに下駄履きでひょうひょうとやって来た。彼は夏子のあきれたような視線を受けて、

「すまないね。靴もスーツも会社用しかなくて、普段着はこれだけでね」

それだけ言うと、彼はさてどこへ行こうかとつぶやいたきり、さつさと歩き始めた。カラン、コロンと、ただ黙って前を歩いて行く。そのうちに小雨が降って来た。

「おっ！ 雨だ。コーヒーでも飲みますか」

と、彼は近くの喫茶店に夏子を誘った。

改めて彼と面と向かい合ったとき、夏子はこらえていた感情を吐き出すように、矢継ぎ早に彼に質問を浴びせた。

「年は？ 出身は？ 家族は？ 趣味は？」

と支離滅裂に聞いた。

彼は楽しそうに、じつと夏子を見つめて、微笑みながら答えた。年は夏子より三歳年上、両親はいない。それ以外のことは、彼は曖昧な答えしかなかった。

夏子は戸惑いながら、それでも年頃の娘らしく、彼が夏子のことをどう思っているか、思い切って聞いた。

「あなた、私のこと大女って笑っていたでしょう」

「えー!! とんでもない。スタイルの良い美人だと、ほめてましたよ」

「嘘おっしゃい。私のこと嫌いなんですよ。いつも無視してるじゃない」

「そんなことはないよ。好きですよ。ただ、俺とは別世界の人だと思っていましたけどね」

彼は夏子が話しかければ、淀みなくきれいな言葉で答えた。ただ彼は、自分には将来のことを思い描く習慣がないので、その日の刹那的な望みしか持たない、と寂しそうに笑うのだった。

「そうなの、じゃあ、あなたの今日の望みは何なの？」

と、夏子は迂闊にも、からかうような口調で聞いてしまった。彼はじつと夏子の目を見つめながら、「君にキスをすることさ」

と、言い終わらないうちに、テーブル越しに身を乗り出し、いきなり夏子の唇にキスをした。店内に客がいらないわけではなかった。そんなことはおかまいなく振る舞う彼の態度に、夏子は動転した。

夏子は男性と唇を合わせたことも初めてだった。東京のプレイボーイ達にも、許したことはなかった。それを、いとも簡単に彼は乙女の領域に侵入して来たのである。

「私、帰ります」

「怒った？」

「知りません！」

夏子は店の前でタクシーを拾った。

「じゃあ、俺、行きつけの店でパイ飲んで帰るわ。気をつけて」

夏子はソツポを向いて、タクシーを走らせた。

「なんて憎らしい男なの。今に見てらっしゃい」

夏子は口に出かかった悪態を、ぐっと抑え込みながら、それでも激しい胸の動悸と、上気した頬、唇をもてあましていた。

(11)

からかわれたかと思った初デートから、一年が過ぎた。

夏子は幸福感に満ちていた。二度、三度とデートを重ねるうちに、彼の扱いに慣れたのだ。彼は何も予定の行動というものを持たなかった。毎日、成り行き次第という生き方をしていた。だから、全ての予定を夏子が立ててやればよかったのだ。

映画を見る、買い物に行く、公園を散歩する、食事に行く、何もかも夏子の決めたことに彼は従った。彼は優しかった。

ある日夏子は、買い物に付き合ってくれる彼に、そっとつぶやいた。

「シユガーダデイ」

彼はキョトンとして聞き返した。

「えっ、なんだって？」

「シユガーダデイって言ったの！」

彼は英語への反応がさっぱりだめだった。夏子が、「甘い優しい私の人」と改めて言うのと、意味を一瞬覚えなかった彼は、ぶすつとふくれていた。

夏子にとってそんな彼は、いとおしくてしかたなかった。夏子は思い切って打ち明けた。

「私、あなたと結婚したい」

「……」

彼は黙ったまま、何も言わなかった。

「ねえ、だめなの？」

夏子の念を押す甘えに、ようやく彼は答えた。

「俺は四十過ぎまでしか生きられないかもしれないよ」

彼は少年時代に大きな手術を受け、担当医から長くは生きられないだろうと忠告されていた。

「それでもよければ考えてもいいよ」

自分の言葉に興奮していた夏子は、彼といっしょになれる幸せにのみ心を奪われ、彼のいう言葉をそれほど深くは気にしなかった。

夏子は早速、父に彼とのことを話した。父は驚いたようだが、何も言わなかった。うれしさのあまりのぼせていたのか、夏子は、父は了解してくれたものと錯覚してしまった。その時、冷静に父の意見を聞いておくべきであった。そうしなかった夏子は、後々悔いることになるのである。

数日後、急に彼の態度がおかしくなった。職場でも夏子の目を見ようとしない。別れ際に人目を避けて、軽く夏子の頬にキスをするやさしさも見せなくなった。

たまらなく不安になった夏子は、彼の下宿先を訪ねた。彼は自分の住まいに夏子が来ることを嫌がっていたが、夏子には耐えられなかったのだ。彼は思い詰めたような表情で夏子を迎えた。

「ねえ、何があったの？ 私、気にさわることした？」

「……」

彼は答えなかった。

「ねえっしたら、なにか言っつてよ」

彼は夏子の視線を避けながら、ようやく話し始めた。

「君のお父さんが訪ねて来たんだよ」

「父がなにか言っつたの」

「君とつき合うのはやめてくれって。許さないそうだ」

「父が何を言ったか知らないけど、私、別れる気はなくなつてよ。いや、絶対いやよ」

「君のお父さんは立派な人格者だそうだね」

「なんのことなの？」

椰揄するような物言いをする彼に違和感を抱きながら、夏子は彼に迫った。

父は初対面の彼に、おだやかな口調で、

「私は帝国大学出身の学徒動員による将校でしたが、部下思いで鉄拳制裁などしたことがあります」などと、自分が若者の気持ちを理解する人間だと、くどくどと前置きし、

「君を傷付けるつもりはありません。だが、娘には近づかないで下さい」と、つまるところ彼を拒否したという。

「娘を思う父親として、胸倉をつかまれ、怒りをぶつけられた方がまだましだった。それなら、当然の人情として受け流しただろう。だが、人格者として善人振りを見せつけられて俺を否定した以上、俺は君のお父さんに頭を下げるわけにはいかない」

彼は一息にそこまで言うと、あとは、虚空を見つめて沈み込み、冷たい横顔を見せるだけであった。

「いやよ！ 私、結婚式をしたいわ。父に頭を下げてよ」

夏子にはその時、彼がなぜそこまでこだわるのか理解できなかった。夏子にしてみれば、どこの父

親でも一度は反対する。それに対し、頭を下げて娘を下さいと言うのが普通ではないか。なぜ、彼はそうしてくれないのか。父に溺愛されて育った夏子には、彼の異常とも思える反骨精神に思いが至らなかつたのである。まして、屈辱を晴らす為に人生を賭ける、などという彼の特異な感性が夏子に理解できるわけがなかつた。

(三)

間もなく、彼はホテルを退職した。夏子もすでに辞めていた。父が続けることを許さなかつたのである。父は彼に会うことさえも許そうとしなかつた。頑な父の態度に、夏子は戸惑いながらも必死に父を説得しようとした。

「なぜ彼とは結婚ができないの？」

「彼は社会人として失格だ。お前の相手としてふさわしいとは思えない」

断定的な父の主張に疑問を感じた夏子は、

「お父さん、もしかして彼の身辺調査をしたの？」

その通りだった。父の調査は徹底していた。夏子が悲しくなるほど、彼のことを知っていた。

彼は七歳の時に両親を亡くし、姉達と共に祖父に育てられていた。親と縁のない生活をした彼の感性が、人並みでないことはなんとなく夏子にも理解できる。

高校を卒業して、大学受験に失敗した彼は、〇市の予備校に入ったのだが、すぐに失踪している。二年間の放浪生活の後、田舎に帰り、町役場に就職した。しかし、そこも一年と落ち着かず、京都に出て再度大学を受験した。

「彼は三流大学にしか入れなかった。しかも、左翼で、学生運動にも参加している。あの大学出身者を採用する企業はない」

父が彼を拒否する決定的な理由であった。

「彼は公務員にも、教師にもなれなかった。ホテルには縁故で、お情けで入れてもらったということだ。この先、彼が社会人として役立つ人間になれるとは思えない」

父の説明を聞いて、夏子は、彼の虚無的な生き方が、健康上の理由だけではないことを改めて知ったのだった。学生時代の挫折から、社会に背を向けた生き方をしている彼の人格を父は否定したのだった。

父は拒否する理由を具体的に彼に説明したわけではない。しかしそのことを彼は、父の態度から瞬時に覚ったのだ。秘められた彼の心の屈折を父は打ちのめしたのだ。だからこそ、父の行為は、彼にとって最大の屈辱になったのである。

受けた屈辱に、身悶えするほど苦しんだ末に決意したのだと、彼は転職の理由を夏子に伝えていた。

「今まで通りの生活では、経済社会のことはわからない。俺は君のお父さんと同じ土俵で闘いたいのだ」
夏子には彼の気持ちが痛い程わかった。しかし、男としての生き様などという意地は、恋する女心には、決して納得のいく感情ではなかった。だが彼は、夏子の心を知ってか知らずか、夏子の望ましい世界に突き進んでいった。そして、夏子に対する彼のやさしさが、夏子の手から次第にこぼれ落ちていくことを感じるのであった。

彼は下宿先を出て、マンションを借りた。新しい職場は、創業したばかりの従業員百名程の会社であった。何もかも新規に始める工場で、経験のない彼にとっては、幸運であったといえよう。元大企業出身の優秀な経理マンの指導を受けたことも幸いした。

早朝からの出勤、夜遅くまでの仕事と、なすべき事に没頭した。彼は次第に仕事人としての知識を積み、会社でも頼られる人物に成りつつあったようである。

だが、夏子にとっては寂しいことであった。彼の関心をひとり占めにできない時の経過に、夏子は焦りを感じるのだった。

彼にとって、これまでの刹那的な生活から、仕事人へ変身はかなり激しい心境の変化をもたらしたに違いない。微笑みと、優しさの消えた彼の眼差しに、夏子は次第に耐えられなくなっていった。もはやそこには、夏子の愛しい「シュガーデイ」はいなかった。

「彼の心は、私には重すぎる。とても支えられない」

夏子は、結局彼と別れる決心をした。

「私、あなたと別れます。私、一生他の男性を愛することはありません。あなた、早く他の人と結婚して幸せになって下さい」

夏子の泣きながら告げた別れの電話に、しばらく沈黙していた彼は、やがて、押し殺したような声で夏子に答えた。

「今さら俺に、優しい言葉をかけないでほしい。未練が残る。むしろ、俺を踏み越えて行ってくれ。その方が、俺にはふさわしい」

彼の絶望的な別れの言葉であった。

(四)

すっかり変わり果てた駅構内のショッピング街を巡りながら、夏子は久しぶりに彼の思い出にひたっていた。いつもは途中下車もしないし、〇市を通過するときはあえて目を閉じ、町を見ることもない。この度は、還暦を過ぎた老いの感傷からか、つい思い出の町に立ち寄ってしまった。この町で

父との生活を偲ぶ限り、彼を思い出さないわけにはいかない。彼の最後の言葉が、幻覚のように夏子の耳に蘇る。

五年前、母が亡くなったとき、しみじみと父が夏子に話したことがあった。夏子が彼と別れて十年程過ぎた頃であろうか、〇市の経済界の新年互礼会で彼に会ったという。

彼はまっすぐ父を見つめ、堂々と胸を張っていた。以前の弱々しく見えた彼とは別人のように、父を見る目付きは鋭く、今にも飛びかかるかのような気迫がしたという。迂闊にも父はその時、彼の視線を避けてしまった。

その再会以来、父はあらゆる所で彼の視線を受けるようになった。ゴルフ場で、あるいはホテルの会食先でと、度々出会い、その度に彼は挑むように父を見つめた。

最後に会った時は、やはり、経済界の新年互礼会であった。彼は父を見つめ、その時は近づいて来て、父に何か言おうとした。父は思わず彼の言葉を遮り、自分でも思いがけない言葉を出していた。

「私は親として、人として失格でした」

と、うわずった声で話し、驚く彼を残してその場を逃げるように去ってしまった。もはや、父は彼の視線を受け止める気力を失っていたのである。父はその時、会社を辞める決心をしたという。

父の引退が、彼に追いつめられたせいであるとは、父の名誉の為にも言えるわけではない。だが父は、夏子がいつまでも結婚しないのは自分のせいであり、娘の幸福を奪ってしまったという悔いを残して

いたのであろう。そして、彼の視線を浴びる度にそのことが思い出され、耐えられなかったのかもしれない。結婚生活を選ばなかったのは、決して父のせいではなく、夏子の意志であったのだが、今さら父に説明しても無駄であろう。

駅構内の散策を切り上げた夏子は、ようやく実家に帰る気になって、在来線のホームに急いだ。彼が恋人であった頃、週末に実家へ帰る夏子を、彼はよく見送ってくれた。ドアが閉まり、動き始めた電車を追いかけて、手を振ってくれた彼を思い出す。

今、夏子は発車のベルを待ちながら、若き日の彼に話しかける。

「あなた、あなたは目指した土俵で闘い続け、幸せでしたか。私には、男の意地など今でも理解できません。私はただ、あなたの優しさが好きでした……」

二度と会うことのない彼に話しかける夏子の心に、湧きおこる悲しみは、自分が得られなかったものに対する後悔の念では決してなかった。夏子に関わる父と彼、二人の男が永い間、精神的に闘いの時を過ごしたことに對する哀切の情であった。

彼は、父から受けた屈辱をはらす為に、生き方を変える闘いに挑み、父は父で、彼の視線をさけるという屈辱に苦しんだ。うかつにも、夏子は、二人の男の葛藤から目をそらしてしまったのである。

発車のベルが鳴り終わり、動き始めた電車に、夏子を目指して走り寄る者は誰もいない。

「さようなら!! シュガーダディ」

夏子の呼びかけに

「えっ! なんだった?」

と、戸惑いの表情を見せる彼を思い描きながら、夏子はようやく、封印していた青春の思い出から解放される思いがしたのである。

